

稲 山 会

通 信

第34号

2017年1月1日発行

発行人：斉藤雄二 発行所：稲門山の会事務局 TEL 03-3367-3723 FAX 03-3367-8150 ©稲門山の会1998

平成 29 年を迎えるにあたり「ビレー解除・登攀終了」

毎年4月の初め、早稲田大学の構内は異様な雰囲気にも包まれる。音・人・色・活気・熱気・これらの動きが流れとなり、渦を巻いて湧き上がる。これが新歓（新勧）だ。学内の文科系・運動系の無いものは無いと思われる位の、ありとあらゆるサークルが参加する。

社会に出て幾年過ぎても、好き嫌いは別にしても、一度この強烈なエネルギーを体感することをお勧めします。

我が山の会も、ありとあらゆるサークルの中の、ほんの一つの存在ですが、他サークル同様、ここが山の会のある種の原点です。

山の会は現在 10 指に余る山関係のサークルの中で、その存在感を 60 年間主張してきました。これは立派なもので、大いに自慢し、誇りにしてよいと思います。

山の会の立ち位置からして、今後も大幅な人数増は見込めないにしても、地道な活動を続けて行けば、その存在は薄れることなく、将来においても継続されるであろうし、又継続して欲しいと願います。

以前「やまの会の育成を登攀と仮想」云々と書いて、現在まで続けてきました。ここに来て、ようやくその登攀も終了点に近づいた感があります（自認）。何をもって終了点とするかは大変難しいところですが、人によってそれぞれ違いは多少あっても、目的とするところは同じでしょう。よってここにビレーを解除し、自らの完登したいと思います。

仮想と云えど、登攀時のザイルは大いなる信頼と絆となって我が余生の糧となって生きるでしょう。

10 年近い間でありましたが、確保してくれた仲間には、ただただ感謝、感謝！！

会員の皆様、ご協力に感謝！！ 有難うございました。



上田代表（創立 60 周年記念祝賀会）

2017 年 1 月

稲門山の会代表 上田訓夫

新年会・総会のご案内

お陰様で早稲田大学山の会・稲門山の会が創立 60 周年を盛況に迎える事ができました。これも皆様のご協力の賜物と感謝しております。

皆様ご存知の様に、8 月 11 日が「山の日」として 2016 年から国民の祝日に制定されました。長年、登山団体・登山愛好議員が中心となって、健全なる若い人達が「山に、自然に親しんでほしい」との願いから活動してきた賜物です。皇太子殿下もこの活動にご尽力し、上高地での第 1 回式典にも出席されました。スポーツクライミングが東京オリンピック種目に採用され、今後も若い人達が「山に、自然に親しむ」ことが大いに期待されています。

「早稲田大学山の会・稲門山の会」も学生の登山活動が活発化する様に、より前向きに取り組んでゆきたいと考えております。

さて 2017 年の新年会・総会は以下の通りです。今年も OB・OG の皆様が多数ご出席して戴きたくお願い申し上げます。創立 60 周年記念の T シャツをまだ受取っていない OB・OG の皆様には、新年会会場にて無料で贈呈致しますので、記念にお受け取り下さい。

日 時：2017 年 1 月 28 日（土）午後 3 時から

場 所：早稲田大学大隅会館

会 費：6,000 円（別途年会費 4,000 円）

稲門山の会役員会

副代表 井村英明

春のハイキング（奥多摩・浅間嶺）のご案内

古より交易の道として歩かれてきた浅間嶺（せんげんれい）はのびやかで展望の良い山道です。奥多摩で一番遅い山上の桜を愛でながら、新入生歓迎も兼ねて OB・現役ともども楽しいハイキングをしましょう。皆様お誘い合わせのうえご参加下さい。

日 時：2017 年 4 月 9 日（日） 8:55 集合

集合場所：JR 武蔵五日市駅前 西東京バス停①番（9 時発数馬行き）

行 程：武蔵五日市駅～浅間尾根登山口～数馬分岐～人里峠～浅間嶺～休憩所～展望台
～時坂峠～払沢ノ滝入口～武蔵五日市駅

幹 事：新井昭夫（S46 年卒） araia@nifty.com 080-1161-5306

松村幹雄（S48 年卒） mykof04@s5.dion.ne.jp 080-5175-9695

※参加ご希望の方は 4 月 2 日迄に上記幹事宛にご連絡下さい。

山の会創立 60 周年記念「徳澤園の夕べ」

新井昭夫 (S46 年卒)

昨年の役員会で、来年の創立 60 周年の記念の行事として、懐かしい徳澤園に集まる事が決定されました。2016 年 2 月の総会・新年会を兼ねた記念祝賀会の席で計画を紹介し、参加者を募りました。因みに 60 周年記念としては、他に記念 T シャツの配布、山の会の旗の作成、古くなった山の会の提灯の新調も行いました。

「徳澤園の夕べ」の日程は、徳澤園と打ち合わせの上、混雑する夏山と秋の紅葉の季節の狭間の 9 月 2 日(金)と決定。徳澤園は早稲田に馴染みが深く、丁寧に対応してくれたのが嬉しかった。20 名の参加予定でしたが、当日 2 名の欠席があり 18 名の OB の参加となりました。学生もこの日に合わせ、夏山合宿を 2 パーティー計画し、真藤幹事長(3 年)がリーダーで、3 名が烏帽子から槍・穂高を縦走し、岳沢経由で徳沢入りしました。もう 1 パーティーは、厚木(2 年)がリーダーで、2 名で燕岳から蝶ヶ岳を経由し徳沢へ入る計画でしたが、1 年生が不調のため計画を変更し、燕岳で下山し厚木のみが徳沢入りしました。

この日の天候は、台風 10 号一過の好天で、明神・穂高連峰がはっきり望めました。徳澤園では 18 名の相部屋を山の会で専有することが出来、飛行機のビジネスクラスのシートの様な寝床で、衝立があつて隣の軒が気にならずゆっくり眠ることが出来ました。宿泊者と一般客との区別が明確で、風呂・食堂は宿泊者専用となる為、学生 4 名との懇親は、外来客の使用する一般食堂で実施



夏合宿から駆けつけた現役、徳沢にて テントに泊まる学生は徳沢ロッジで風呂に入り、夕食は徳澤園の一般食堂で取るようにし、全員で記念 T シャツを着て、新調した山の会の旗を掲げ記念写真の撮影をし、21 時の消灯時間まで、持参した赤ワイン・ウイスキーで懇談を行いました。

翌日も好天が続き、徳澤園から眺める明神・前穂高の岩稜が美しい。朝食後解散となり、蝶ヶ岳ヒュッテに泊り絵を描く栗又 OB、蝶ヶ岳を越え大滝山荘に泊り、翌日徳本峠を経由し上高地に下る笠原 OB、蝶ヶ岳を越え、その日の内に上田に出る廣瀬 OB、上高地散策組、平湯・新穂高温泉へ向かう組とそれぞれ分かれました。

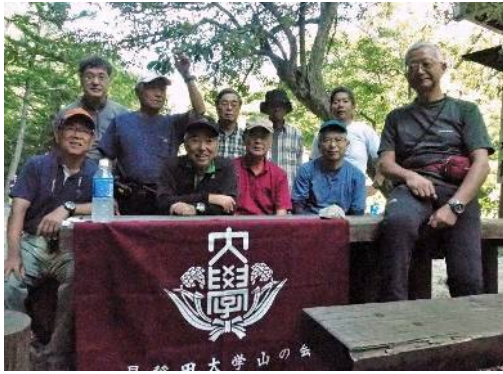


河童橋にて、比較的古い OB

することにしました。折角の学生と一緒に懇親会が、外来の一般食堂を他の客に占められ、大勢での懇親会を開くことが難しいかと懸念しましたが、幸いまとまって席を取ることが出来ました。



新井幹事の音頭で乾杯



帰路、比較的新しいOB

役員組（斉藤、金子、島田、新井、松村）は焼岳に向いました。焼岳は梯子もあって予想以上にハードでしたが、北峰から観る荒々しい南峰と、間近に見る噴気孔、笠ヶ岳から穂高岳に連なる峰々、緑に囲まれた上高地のバスターミナル、赤い帝国ホテルの屋根、岳沢ヒュッテ、西穂山荘、青い屋根の焼岳小屋の眺めは素晴らしいものでした。昔ながらの山小屋の風情を残す焼岳小屋に宿泊し、翌日は上高地に戻る組と中尾温泉に下る組に分かれました。

最後に、「60周年記念」と銘打った「徳澤園の夕べ」でしたが、終わってから改めて60年の長さを考えました。会報の稲山会通信を読み返し、上田代表の「親の責務」「親の登攀」「親の執念」「親の矜持」の言葉に身が引き締められました。山の会は、数年前学生が集まらず、会員不在の状況が続き消滅の危機がありました。その後、何とか会員が確保出来て、去年は「上高地から北アルプスを北に縦走し、拇海新道を経て日本海へ飛び込む」、今年は「烏帽子から南へ、槍・穂高を縦走し岳沢を下る」と元気に山に取り組んでいます。その学生達と上高地を一緒に歩き、徳澤園で一晩過ごせた事は意義ある60周年記念だったと思っています。OB・OGの皆様の引き続いての「子の成長の見守り」をお願い致します。

参加者：

- (OB) 西山賢嗣 (36)、廣瀬舜一 (36)、加納孝治 (37)、打矢之威 (37)、栗又功雄 (38)、笠原豈 (40)、金子治雄 (41)、斉藤雄二 (41)、新井昭夫 (46)、島田弘康 (46)、松村幹雄 (48)、後藤洋一郎 (49)、加藤忠治 (50)、小竹正雄 (50)、倉本弘 (51)、鹿間行喜 (51)、柴原至 (52)、山根 (廣瀬の友人) 参加予定だった井村英明 (40)、田野辺親遠 (40) は都合で不参加 (幹事：新井昭夫、松村幹雄)
- (学生) 真藤幸輝 (3年)、大津靖登 (2年)、立島光二 (2年)、厚木沙里 (2年)



全員で記念撮影 (徳澤園にて)

OB 有志山行（双六～黒部五郎～太郎平縦走）

金子治雄（S41 年卒）

参加者：L 金子（41 年）SL 島田（46 年）太郎良（43 年）新井（46 年）

行 程：7 月 27 日：大手町～新宿～新穂高温泉（夜行バス）

7 月 28 日：新穂高温泉～ワサビ平～鏡平山荘

7 月 29 日：鏡平山荘～弓折岳分岐～双六小屋～三俣蓮華岳～黒部五郎小舎

7 月 30 日：黒部五郎小舎～黒部五郎岳～北ノ俣岳～太郎平小屋

7 月 31 日：太郎平小屋～折立～亀谷温泉（大山民俗博物館見学）

8 月 1 日：富山より帰京（北陸新幹線）



小池新道

昨夏に引き続き OB 有志の夏山山行を実施した。昨年の状況から、もう少し長い山行も可能と考え、学生時代夏山合宿で辿った北アルプスの最深部の黒部五郎岳から薬師岳の稜線を、雲ノ平を眺めながらの山行を企画した。今では雲ノ平へ最短の伊藤新道が廃道になったが、代わりに鏡平への小池新道が整備され、双六までが容易になり、また折立から太郎平へのアプローチも短く薬師岳も近くなった。しかし、それで

も黒部五郎岳から北ノ俣岳（上ノ岳）の稜線は、我々年寄りにとって新穂高から 3 日を要する魅力的な山城だった。

小池新道は 50 年前、卒業後同期の杉村、沼田、小田、秋野 OB たちと、黒部川源流を遡行し三俣蓮華から双六に出て初めて下った。その時、鏡平山荘は未だなく、高山駅に出るため新穂高発の数少ないバスに乗り遅れまいと、開通したばかりの荒れた道を走って降りた記憶があった。

小池新道はこの 50 年前の記憶と全く違って、平らな石が敷き詰められた素晴らしい登山道に生まれ変わっていた。小池オーナーの方針の基、鏡平山荘の大澤支配人が中心になって登山道を整備されているとのこと、北アでは室堂から一ノ越に匹敵する第 1 級の登山道に生まれ変わっていた。夜行バスで、既に消耗した我々にとって、整備された登山道は全くストレスを感じることなく、初日の登りという最初の関門を容易にクリアできたのだった。翌朝、鏡平山荘大澤修支配人の小池新道整備のご努力に対して、この道を利用させていただく登山者として感謝を申し上げた。



鏡平山荘大澤支配人と



双六岳の巻き道



三俣蓮華岳ピークにて

双六岳の巻き道を、昭文社の5万分の1の地図を見ながら歩いていると、地図上の1cmや2cmの距離はとても短く感じられる。三俣蓮華岳には直ぐ着くかと想っていると、ガスの向こうにもう一つピークが現れがっかりしてしまう。やはり北アは山のスケールが大きいことを改めて実感し、以後地図より目測を重視して歩くことにした。

黒部五郎小舎～黒部五郎岳、北ノ俣岳（上の岳）～太郎平が今回の縦走のハイライトだった。この日は5時半の出発時より雨が降り、黒部五郎のカールで雨具を脱いだものの、ピークを降りて鞍部から雷を伴う本格的な雨となった。雨の中、いくつかの無名の小ピークや赤木岳を越えて、ようやく北ノ俣岳のピークに着いた。気が付くと雨も小雨に変わり、後は太郎平小屋への長く緩やかな下りが待っているだけだ。この広い山稜にいるのは我々だけでもあったので、天に向かって「早稲田の栄光」と「都の西北」をかなり立て、満足感をかみしめた。



北ノ俣岳ピークにて

天候不順のため薬師ピストンは諦め、山を降りて長次郎や播隆上人の故郷大山村の博物館を見学し、亀谷温泉でたらふく食べた。今回の山行は、それぞれ個性溢れる仲間たちと会話を楽しみながら、足が揃った愉快で忘れられない山旅の一つになった。



記念 T シャツを着て黒部五郎カールにて

現役夏合宿（北アルプス裏銀座・槍・穂高縦走）

真藤幸輝（3年）

日 程：8月26日～9月2日（7泊8日）＋9月3日徳沢（1泊）

参加メンバー：真藤（L、3年）、立島（2年）、大津（2年）

- 1日目：**信濃大町から高瀬ダムへタクシーで移動した。
- 2日目：**高瀬ダムからブナ立尾根を通過して烏帽子小屋へのハードな登り。しっかりと雨が降っていたため汗と雨でずぶ濡れになりながら登った。
- 3日目：**烏帽子小屋～水晶小屋～水晶岳ピストン～鷲羽岳～三俣山荘の縦走。この日は快晴で気持ち良い稜線歩きだった。昨年も逆ルートで通過したのだが、その時は猛烈な風雨で景色を楽しむどころではなかった。
- 4日目：**三俣山荘～双六山荘～槍ヶ岳山荘の縦走。視界はあるものの、台風が近づいてきて風が強い。2日連続で長い行程だったのでかなり疲れた。
- 5日目：**台風により槍ヶ岳山荘停滞。このまま進んでも南岳の先の大キレットを通過できないと判断して停滞した。浸水したテントの水を何度もかき出した。
- 6日目：**テントを強風にあおられて一睡もできないまま朝を迎えた。強風から逃れるためにひとまず天狗平まで標高を下げる。その後、天狗池経由で南岳小屋まで登り返した。まだ風が少し残っていたため、前日に懲りてこの日は小屋泊した。



南岳から穂高を望む



北穂の登り

7日目：南岳小屋～大キレット～北穂高岳～穂高岳山荘の行程は、今回のメインイベント。台風は遠ざかり、風も弱く晴れていた。危険ということで有名な大キレットは、かなり整備されていて思ったほど険しい道ではなかった。どちらかというとも北穂高岳～穂高岳山荘の道の方が険しいように感じた。

8日目：穂高岳山荘～奥穂高岳～前穂高岳～岳沢小屋～上高地というルートで下山した。奥穂高岳に登っている途中で日の出を見ることができた。

また、上高地に着いた後に徳沢まで歩き、60周年記念集会に参加した。



朝の奥穂高山頂にて

今回の縦走を通して最も印象に残ったのは槍ヶ岳での台風経験だ。2日間とも自分たち以外にテント泊の客がいなかった。結局、天候も回復しないし3人ともこの時期の槍ヶ岳にすでに登っているということで、このルートを通りながらも槍の穂先には登頂しなかった。それでも大キレットに行きたいと思いルートを変更しながらもこの縦走を最後まで続けることができたのでよかった。



今回の山行の最後のピーク、前穂高岳にて

第16回気象部OB会（10月18～19日）

金子治雄（S41年卒）

紅葉には少し早い季節でしたが、竹内、恩田OBの幹事により、雄大な荒船山を見渡す佐久高原で懇親会を行い、翌日は3コースに分かれてハイクを行いました。

物見岩から目的地神津牧場を目指しましたが、途中、私金子（治）の不手際で牧場に降りる道を見失うアクシデントもありましたが、無事神津牧場に着きました。今回のOB会では、佐久高原から望む雄大な荒船山の眺めと、かつて大島亮吉の紀行で名高かった神津牧場のジャージー牛のビーフカレーと牛乳とソフトクリームを十分楽しむことができました。

参加者：宮野、東、恩田、金子（弘）、古林、高橋、金子（治）各OB・OG
竹内、関根、笠原各OBご夫妻



全員集合写真

投稿「ペルーアンデスの思い出」

滝沢信一（S36 年卒）

昭和 36 年（1961 年）3 月政治経済学部経済学科卒ですが、余り勉強しなかったので、「早稲田山の会」卒といった方が良くらいです。山の会では生涯の友達と、忘れがたい山々の思い出を得ることが出来ました。

卒業翌年にはふる里十日町市に帰って参りました。当時の十日町は「きもの」産業が盛んで多くの織物工場があり、そこで働く若い男女は 5,000 人以上いるという時代でした。この人達に山の会で学んだ山の素晴らしさと登山技術などを指導出来たらと思い、十日町山路野会「やまみちのかい」を立ち上げました。早速どんどん会員が集まり、最盛期には会員 120 人以上で、ハイキングから夏山合宿や冬山合宿など、かなり充実したクラブになりました。

海外登山も台湾の玉山（新高山）を手始めに、キリマンジャロやアコンカグアなどにも行きましたが、その中でも最も思い出に残る遠征は、1972 年に行ったペルーアンデスのチンチェイ（6,222m）です。いずれの山も私は隊長として参加しました。

ペルーアンデスを選んだのには、いくつかの理由があります。第 1 にペルーアンデスのコルディラブランカ山群には 6,000m 級の山が集中していること、第 2 にその中でも、チンチェイは 1939 年にドイツ隊による初登頂以来、8 登されているが、日本隊としては上智大学隊が 1965 年に失敗して以来、まだ日本隊が登頂していないこと、隣のチンチェイチコは未登であること、第 3 は以前からインカ文明に興味があり、登山後クスコなどインカの遺跡を見学したいと思ったことなどが主な理由です。



1996 年 2 月キリマンジャロ山頂にて、右端が筆者



1972 年 7 月チンチェイ登頂（BC より遠望）

約 1 年の準備期間を経て、1972 年 6 月 21 日にようやくメンバー 5 人で出発しました。羽田空港には、「早稲田大学山の会」の仲間が、多数見送りに来てくれました。海外遠征は出発出来れば、半分以上は成功と言われていることが身にしみてわかる程、1 年間の準備期間には色々と困難がありました。

6 月 25 日に登山基地のワラスという町に到着、ホテルで休んでいる所に、この町在住の日本人谷川氏が駆け込んできました。アルパマーヨ（5,947m）で日本隊（東京アッセントクラブ）が遭難したとのこと。翌日にはガイド 2 人と共に、急いで救助に向かいました。行程もわからず、高度順化も出来ていない体には、アルパマーヨ街道のキャラバンはとても辛いものでした。アルパマーヨは世界で最も美

しい山と言われる真っ白な三角錐の山です。アッセントクラブの3人は登頂後、下山途中、一緒にクレパスに転落、1人死亡、2人が負傷でした。幸い近くに居たスペイン隊がBCまで運んでくれていましたので、彼らをワラスまで連れ帰り、谷川氏と共に葬儀や埋葬を行ないました。海外での事故処理の大変さを知らされましたが、この救助活動で我々のメンバーは、すっかり高度順化が出来ていました。

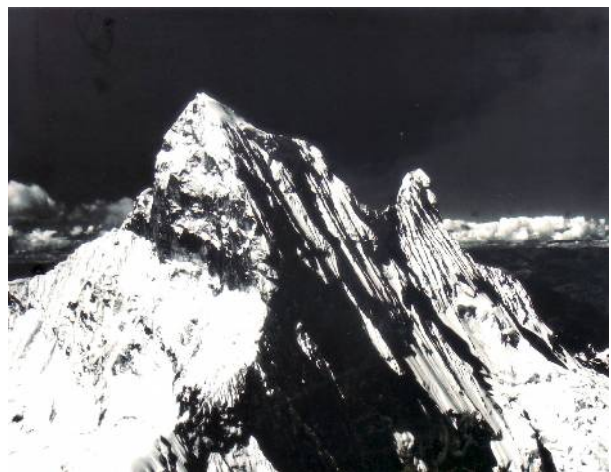
7月5日、チンチェイに向けてキャラバンを開始しました。850kgの装備食料は馬とブーロなど17頭で運びました。7月7日にBC(4,200m)着、早速翌日より行動を開始、第1・第2キャンプと荷揚げを続け、アタックキャンプ(5,300m)を7月17日に設営、7月21日に登頂しました。十日町を出発してちょうど1ヶ月になっていました。私は当日第1キャンプで、1日中双眼鏡で彼らを追いかけていました。トランシーバーの調子が悪く、登頂後メンバーの1人が、第1キャンプまで報告に降りてきてくれました。2人で夜遅くまでピスコで乾杯して、シュラフに入ると、1年間の苦勞と嬉しさが込み上げてきて、涙が止まりませんでした。

もう1つの目標であったチンチェイチコは、このBCから登ることはできないことがわかって、近くの山に登頂して登山を終了しました。ペルーアンデスは、ベースキャンプまでのアプローチが短いので、比較的楽にBCまで行けますが、その分、山は急峻です。しかも1日の気温差が大きいので、氷河の動きが激しく、登りに作ったルートも、2~3日して下りてくると下れないのは当たり前という状態です。氷壁が崩れてものすごい雪崩が起きたり、夜中に氷の割れる音がするなど、不気味です。しかし真っ青な空に、鋭くとがった真っ白な峰々が聳え立っている光景は息をのむ美しさです。

インカ文明の遺跡を訪ねて、クスコやマチュピチュに遊んで、帰国の為リマに帰ってきた日に、今度は金沢大学山岳部のチャクララフ

(6,011m)の遭難を知りました。この連絡はリマ在住の早稲田大学岳友会OBの宮下昭氏からでした。宮下氏は後に三菱ペルーの社長を務め、日本大使館人質事件に巻き込まれ、100日以上人質になっていた人です。

登山シーズンの終りに近い頃でしたが、まだリマに残っていた幾つかの日本隊のメンバーを



チャクララフ (6,011m)

集め、再びワラスに向かいました。私は遭難救助が2度目であり、その時の最年長ということで、寄せ集め救助隊の指揮を執ることになりました。チャクララフはペルーアンデスでも最も難しいと言われ、初登頂はリオネルテレイの率いるフランス隊でした。金沢大学隊は和田隊長と2人のアタック隊員の3人のメンバーです。衝立のような山容の頂上直下で雪庇と共に2人が墜落、うち1人はザイルの先にぶら下がっている状態のようでした。隊を2つに分け、1隊は衝立の反対側に回り、氷河の中を搜索しましたが、アイゼン片方と、ニッカーズボンの切れはしが見つかっただけでした。もう1隊はフィックスを使って稜線に上がり、ザイルの先のもう1人を引き上げようとしたのですが、どこかに引っ掛かっていて、引き上げられない状態でした。最後の手段として、雪を詰めたポリタンクをそのザイルの端に結びつけて、錘として谷に投げて引っ掛かりをはずせば、谷底に身体も落ちるのではないかという作戦をたてました。いよいよこの作

戦を実行しようとした時に、登頂ルートフィックスの所に雪崩が起き、その下のアタックテント共々宙に舞い上がりました。残念ながら2人の収容を諦め、和田隊長と共に下山しました。2人を山に残して下山する和田隊長の心情を思うと、言葉ありませんでした。見つかった片方のアイゼンを白木の箱に収めて、ワラスで葬式を行いました。自分達の登った山と共に2度に亘る遭難救助は忘れられない思い出です。

リマの宮下氏、金沢大学の和田氏とはその後も親しくお付き合いをお願いしました。宮下氏は残念ながら先年お亡くなりになりましたが、和田氏はその後エクアドルの三菱商事に勤め、定年後の現在はエクアドルで農園を経営されています。

十日町山路野会の仲間もみな高齢になり、今では山の思い出を語り合い乍ら、酒を飲む仲間となっていました。それでも市の体育協会に所属する十日町市山岳協会として、市民を対象にした市民ハイキングを年2回行っています。私は現在、その十日町市の山岳協会長をしております。

近年は中高年の山登りが盛んです。定年退職した男性や子育ての終わった女性を対象にした高齢者ハイキングクラブも作りました。「十日町楽山会」と言います。この会も20年になります。現在会員60名余りで、5月から12月の無雪期に年間13回の計画を立て、日帰り山行を行っています。マイクロバス利用で、3時間から5時間位歩き、帰りには、麓の日帰り温泉で汗を流して戻る程度の山行です。年1回は小屋泊の山行もあり、昨年は鹿島槍、今年は火打・妙高でした。特に女性会員の元気は驚きです。



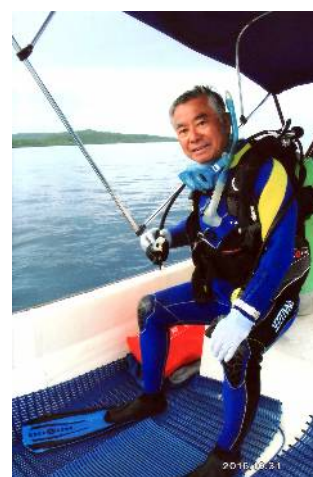
市民ハイキング（根子岳）

私も来年は80歳です。山歩きのバランスが悪くなり、いつまで山登りを続けられるか不安ですが、お陰様で何とか元気です。最近では今年の秋に、会津の蒲生岳、東北の栗駒山の登り、10月末にはミクロネシアのヤップ島でダイビングをしてきました。仕事も続けておりますが、息子が社長で頑張っていますので、邪魔にならない程度に経営の手伝いをしてゆきたいと思っています。今日この頃です。

(2016年11月記)



2016年9月栗駒山にて



2016年10月ヤップ島にて

投稿「お国自慢：我が福井県」

小竹正雄（S50 年卒）

本通信の発行人であります齊藤 OB から「福井のお国自慢」を書いて欲しいとのお手紙をいただき、少々荷が重いのですが、私が生まれ育ち、終のすみかとなる「福井県」の「お国自慢」を記させていただきます。

私は卒業後福井県庁に奉職し、定年まで地方行政に携わってきました。国の地域振興政策は、戦後一貫して大都市と地方の格差是正、国土の均衡ある発展を旗印に、地方への工場誘致や高速道路・新幹線の整備、定住の促進、交流人口の拡大等の政策が推進されてきましたが、一定の成果はあったものの所期の目標は達成されず、近年の顕著な東京一極集中を招き、地方では“限界集落”が顕在化し“地方消滅”が囁かれるに至っています。

現在、「地方創生」が唱導されていますが、地方活性化策の柱の一つが、訪日外国人（インバウンド）を含む「観光」です。観光とは“光”を“観る”、光とは“国（地域）の優れたところ、特色あるところ”となります。会員の皆様には、お知り合いの方々をお誘い合わせの上、一人でも多くの皆さんが福井県を訪れていただければと願っています。

1. 「荒島岳」（大野市）

まずは「荒島岳」（1523.5m、コースタイムは 5 時間 30 分程度）です。「日本百名山」の一つとして県内外に知られている秀峰です。深田久弥氏は石川県大聖寺町（現在の加賀市）生まれですが、母親の実家が福井市にあった関係で福井中学へ入り、“山への病みつきはその頃からである。”と書かれています。

本棚から大学時代に購入した「深田久弥 山の文学全集」を引っ張り出して関係する頁を繰ると（注）、深田氏が夫人と共に荒島岳に登られたのは 1961 年の 5 月、また法恩寺山、経ヶ岳、赤兎山、願教寺山など加越国境の山々の名があり、高校の山岳部当時に登った記憶が蘇ってきました。ちなみに私が荒島岳に登ったのは 1967 年か 68 年であり、高校の先輩（前身は福井中学校）に当たる深田氏より六、七年後ということになります。

注）『瀟洒なる自然—わが山旅の記』（昭和 42 年刊）所収「越前の山」に詳しい。



荒島岳

2. 白山平泉寺（勝山市）

白山信仰の越前側の拠点・馬場（ばんば）として、泰澄大師によって養老元年（711 年）に開かれたと伝えられています。最盛期には 48 社・36 堂・6 千坊、僧兵 8 千人の巨大な中世宗教都市を形成しますが、天正元年（1573 年）織田信長により朝倉氏が滅ぼされると、翌天正 2 年（1574 年）一向一揆によって一夜にして全山焼失しました。その後、境内の中心部は再興され、現在は、樹齢 300 年以上の杉が立ち並び、約 700m の石畳が続く菩提林と呼ばれる旧参道、境内に広がる見事な苔、発掘調査によって河原石が敷き詰められた石畳道や整然と方形に区画された坊院跡などを観ることができます。



白山平泉寺

白山信仰や平泉寺の盛衰については、司馬遼太郎の「街道をゆく—越前の諸道」に詳しく、“中世、平泉寺は悪僧の巢窟でもあった”との記述もあります。それを裏付けるように、高さ 20m 以上の柱状節理の岩肌が日本海にそそり立ち、国の名勝・天然記念物の指定を受けている越前海岸「東尋坊」の名前の由来は、怪力の持ち主で悪行を重ねて、仲間の僧侶に岸壁から突き落とされ

た平泉寺の僧“東尋坊”から名付けられたそうです。

ところで、白山は越前、加賀、飛騨の三国にまたがっていて、越前側から頂上(禅頂)までの登山道であった越前禅定道は、越前馬場(現在の平泉寺白山神社)を起点に御前峰山頂まで、直線距離で約 30km です(現在は一部が通行可能です)。

私は白山に幾度となく登っています。近くは還暦を迎えた 5 年前、10 月の初め秋晴れの週末の日帰りです。夜半の 3 時過ぎに自宅を車で出発、勝山市を経由して市ノ瀬へ、バスで別当出合まで、同所を 5 時半発、砂防新道(一般的登山道)を室堂から御前峰の頂上に 9 時半頃着、御池めぐりコースを廻り、下山は観光新道(越前禅定道と重なります)を下り別当出合に 13 時半に到着。日も明るいうちに自宅に着きました。日帰り以外では、室堂平や南竜ヶ馬場の山小屋で 1 泊して、高山植物や北アルプスの眺望を楽しみ、ゆったりとした時間を過ごしたり、南竜ヶ馬場から別山・三ノ峰・上小池・鳩ヶ湯(福井県大野市)まで縦走(1 泊 2 日)し、山歩きを満喫するといった山行です。

3. 一乗谷朝倉氏遺跡(福井市)

一乗谷は、戦国大名の先駆けとなった朝倉孝景の代、応仁の乱(1467 年)での活躍を機に居城を移し、以後 5 代 103 年間にわたって越前の中心として繁栄した朝倉氏の城下町でした。城下 1 万人とうたわれ、京や奈良の貴族・僧侶などの文化人が下向し、北陸の小京都とも呼ばれましたが、1573 年に最後の当主義景が織田信長との戦いに破れ、一乗谷は社寺仏閣、居館から町屋に到るまで全てが灰燼に帰しました。

一乗谷朝倉遺跡は、戦国大名の館や庭園、城下町の遺跡が発掘され、国特別史跡に指定されています。発掘された堀の石垣や礎石をそのまま使用し、柱や壁、建具なども出土した遺物に基づいて忠実に復原された武家屋敷や町屋が約 200m にわたって再現されています。



一乗谷朝倉氏遺跡

4. 県立恐竜博物館(勝山市)



恐竜博物館

1988 年に勝山市北谷町にある白亜紀前期の「手取層群」で、1 億 2 千年前の肉食恐竜の全身骨格化石が発見され、以来県による恐竜化石発掘調査が継続して進められています。

この地域で発掘された恐竜をテーマとして、黒川紀章氏が設計し 2000 年 7 月に開館。展示内容は質・量ともに極めて高く、日本を代表する恐竜博物館です。ドーム型の展示室には所狭しと恐竜骨格や化石標本、ジオラマ、復元模型等が展示され、恐竜を始めとする地質・古生物の世界を堪能することができます。昨年度の来館者は 93 万人、昨年 10 月には通算で 800 万人を突破し、県内の一大観光スポットとなっています。

5. 越前がに

『食』では、何と言っても冬の味覚の王者「越前がに」です。11 月 6 日の漁解禁日が毎年の風物詩となっている「越前がに」は、雄のズワイガニのことで脚に全国で初めて黄色のタグを付けブランド化を推進しています。その奥深い旨味の所以は、越前海岸沖が急深で段々畑の海底になっておりカニの生息に好環境の素晴らしい漁場であること、漁場が港に近く鮮度が抜群であること、塩加減と茹で加減で味を引き立てること、にあります。



越前がに

雌のカニは「せいこがに」と呼ばれ、甲羅の中身にある外子（プチプチとした食感が美味）と内子（濃い橙色の卵巣で“赤いダイヤ”と呼ばれ珍味）が好まれています。手頃な価格（「越前がに」の10分の1）なので、わが家の食卓で食するのは専ら「せいこがに」となります。

作家の開高健氏は“それはさながら海の宝石箱である。（略）。私にいわせると雌のほうははるかに深く広大で起伏に富んだ味を持っているのである。”と記しています。同氏をうならせた「せいこがに丼」は、越前町の老舗旅館で「開高丼」として出されています。

6. 越前おろしそば

そばに大根おろしのダシをたっぷりとかけたシンプルな料理です。その食べ方は、①そばの上に大根おろし、ネギ、カツオ節をのせ、その上からダシをかける ②ダシの中に大根おろしを混ぜ、薬味をのせたそばにかける ③大根おろしの汁とダシを混ぜ合わせたものをそばにかけるの三通りあります。

「越前おろしそば」のおいしさは、そば粉の品質の高さと石臼挽きの製粉技術にあります。「おいしい福井県そば使用店」認証店は、県内 71 店舗、県外 20 店舗あり、それぞれに工夫した個性豊かな味を楽しめます。また、県内外で予選会を勝ち抜いたそば打ち愛好家が一同に会し競う「全日本素人そば打ち名人大会（決勝戦）」を毎年開催し（今年度で 21 回）、優勝者を「名人」に認定しています。



越前おろしそば

まだまだ皆さんに知っていただきたい名勝旧跡や海の幸・山の幸が数多くありますが、紙幅が尽きました。（列举しますと、東尋坊、永平寺、丸岡城、三方五湖、熊川宿、小浜の古刹と仏像、越前うに、若狭ぐじ、若狭かれい、浜焼き鯖、へしこ、上庄里芋、花らっきょ、ソースカツ丼、水ようかん、地酒（37の蔵元）、福井米（コシヒカリ）等々）。



2016年9月明神池にて、筆者

最後に、記憶に残る山行の中で思い出深いものとして、一つは常数・坂本両先輩との唐松岳から餓鬼山、祖母谷温泉、樺平へ下り、阿曾原、仙人池、剣沢を登った山行です。錦秋のことばどおりの見事な紅葉、当時日本中の話題となった“ジャコビニ流星群”の出現を剣小屋のテント脇で諦めきれずに天空を見上げていたことなど。ネットで調べると 1972 年 10 月 9 日でした。二つ目は、卒業直後の 10 月上旬、福井県に赴任しておられた原先輩との山行です。当初馬場島から早月尾根～剣岳を目指しましたが悪天候で断念し、急遽新穂高温泉からロープウェイを利用して西穂高～奥穂高～涸沢～上高地へ。西穂から奥穂までの間、折から新雪が積もった岩場や稜線をザイルでどうにか確保しながら（アイゼン是不保持）ヘッドライトを頼りにようやく奥穂高山荘に辿り着き、登山者で満杯の山荘では廊下で夜を過ごしました。不思議と“怖さ”は覚えていません。今後は、体力と体調に合わせた「山歩き」をのんびりと楽しみたいと思っています。

特別投稿「熊本地震で学んだこと」

廣瀬舜一（S36 年卒）

私は「ホームインプルーブメントひろせ」という、主に大分県と熊本県で展開するスーパー Comb（食品＋ホームセンター）を経営しています。2016 年 4 月 14 日と 16 日の震度 7 越える地震、その後も震度 6 の地震が頻発した「熊本地震」に遭遇し、10 億円近い被害を受けました。

当社は食品とホームニーズを扱う生活基盤業態との位置付で営業を行なっています。それ故に「いざという時頼りになる店であってこそ、日ごろのお客様への恩返しが出来、社会的使命が果たせる」という固い信念で、1 日も早い復旧と開店に全力を尽くしました。銀行からの復旧資金の提案もあり、リニューアルの時期が早まったと前向きに受け止め、一段と体質の強い会社を目指してゆきます。

稲山会の皆様にも「熊本地震」総括して学んだことをお伝えしたいと思います。

1) 今まで熊本は地震がないことが常識でした。実際、体感地震は、統計上では年間で熊本が 40 回、大分 80 回、東京 280 回となっていて、地震保険も熊本が一番安かったわけで、専門家でさえ見誤ったこととなります。まさに昨今の日本は、地質学的には大災害時代に突入したという認識を持ち、備える必要があるのではないのでしょうか？ 冷静にデータをもとに地球規模で考えると、日本の国土は世界の 0.25%の面積に世界の 20%の自然災害が有史以来起こっており、これは他の地球エリア平均の 100 倍、まさに日本は災害大国です。人間は平穏な日々が続くと、安心・安全が当たり前になりますが、「絶対ということはない」と再認識です。よく調べれば 400 年前には、大分にも熊本にもマグニチュード 7～8 地震が起きているのですが、15～20 代遡ることになりますので、先祖の言い伝えも途絶えてしまうものなのです。

2) 科学的根拠でということを盲信しない。リスクに対して自分の感性を磨く。本質に基づく直感や本能的な警戒心を大切にする。科学的ということは、測定できないことは存在しないという前提で論理を組み立てる。あるいはこれ以内なら大丈夫と、ある前提を元に想定を組み立てているわけで、「想定外は常にこの世に存在する」のだということを忘れてはなりません。

今回の地震で幸運だったこと、うれしかったことは、

- ① 電話連絡網が途切れなかったこと。手元に携帯電話があった。
- ② 電気・ガス・鉄道・道路網等のインフラの復旧が極めて迅速に行われ、改めて日本の底力を感じたこと。2 日後電源車が全国から集積。1 台 500kW、150 台で 7.5 万 kW を発電し電気が回復した。3 週間後ガスが使えた。全国のガス会社の応援があった。3～5 日後、電車、新幹線の復旧、迂回路明示の徹底があった。
- ③ 自助、共助、公助が上手くまわったこと。自衛隊の強力な支援があった。パニックは全く起きなかった。等々です。

訃報

平成 28 年 8 月 20 日に菊池博さん（S40 年卒）がご逝去されました。
故人を偲び、心からご冥福をお祈り申し上げます。

編集後記

今回の投稿は新潟県十日町市在住の滝沢 OB と福井県鯖江市在住の小竹 OB にお願ひしました。滝沢 OB の投稿は十日町山路野会がペルーアンデス遠征に出かけた際の登頂に加えて、他の日本隊の救助活動に従事された思い出で、内容は昨日起きたことのように鮮明です。小竹 OB の福井県自慢は、地元を誇る気概が伝わって来て、また内容豊富で大変勉強になりました。数年前、同期で白山山麓を旅していますが、又行きたくなりました。

くしくも今回は越前・越後にお住いのお二人に投稿いただいた形になりましたが、越前のおろしそば、越後のへぎ蕎麦と、北陸のそばの美味しさを思い出させてもらうことになりました。お二人の今後とも地元でのご活躍を願っています。

加えて今回は特別に、熊本地震に遭遇された廣瀬 OB に「熊本地震の教訓」を書いていただきました。寺田寅彦の「天災は忘れた頃にやってくる」を思い出させる、私達の生活に役立つ報告です。廣瀬 OB のビジネスが、今まで以上にタフになること願っています。

さて私事ですが、70 歳を越えて足腰がだいぶ弱まり、頂上直下での U ターンが増えています。今年も徳澤園での 60 周年記念集会后、役員仲間で焼岳に登りましたが、焼岳小屋でギブアップし、自嘲して名乗る「8 合目の男」を今回も実証してしまいました。それでも小屋までは行きましたので、集合写真を添付させていただきます。それに今年は尾瀬沼でニッコウキスゲの群生を見ることが出来ましたので、この写真も添付しておきます（後方は燧岳）。

皆様の本年のご活躍を祈念しています。

斉藤雄二（S41 年卒）記



焼岳小屋にて、左から島田、松村、斉藤、金子、新井各 OB



7 月の尾瀬、ニッコウキスゲの群生